

講演名	平成19年度 冬期研修会 ～北の技術を語り継ぐ 講演1:「北海道米の品種改良等に関する話題」 講演2:「米の流通に関する話題」
講演者	講演1: 北海道立中央農場試験場岩見沢試験地 水田転作科長 田中 一生 様 講演2: 株式会社久保商店代表取締役社長 久保 元宏 様
日時・場所	平成20年2月28日 15:00～ (KKR ホテル札幌)
講演概要	

■ 冬期研修会 ～北の技術を語り継ぐ

今回のテーマは「食について考える。米の話題」です。我々の最も身近な食材である「米」について品種改良と流通のそれぞれの観点から、北海道立中央農業試験場岩見沢試験地水田転作科長の田中一生氏と株式会社久保商店代表取締役社長の久保元宏氏よりご講演をいただきました。

田中一生氏からは、米の伝播から北海道における現在までの水田作付け事情や、これまで取り組んでこられた品種改良についてご講演をいただきました。北海道米の品種改良の課題として、冷害の影響と害虫駆除についてご説明いただきました。北海道米が4年毎に冷害を受けた実情と害虫としてカメムシが深刻であるが、九州地方等の温暖な地区の害虫と比較して生命力が弱いいため駆除に要する薬品量が少なく済み、より安全な米への品種改良が可能であるとのことでした。

また、「冷めるとまずい」という問題点を克服するために様々な改良を行ってきたことをご説明いただき、その結果、現段階で北海道米は「米のうまさ」を決定するアミロース含有量とアミノペプシン含有量をトップレベルの範囲内にすることが可能で、実現されつつあることをご教授いただきました。これに安全性が付加されると質・安全性ともに全国一の北海道米が誕生するとのことをお話をいただきました。

久保元宏氏からは、戦前から現代までの米の流通に関わる諸事情等についての講演がありました。雪の多い沼田町で利雪事業の一環として誕生した「雪中米」を紹介され、「新米はなんでもうまい、夏を過ぎると劣化し、品質が低下する。」という観点から、籾のまま雪の冷熱で保存する有効性を示されました。

また、生産者である農家の実情として、1970年代までの家畜農法から機械化農法への急速な進展、コンバインなどの農作機械を協同で購入して使用する協同制度の誕生から崩壊までを説明され、現在の農業法人化がもたらすメリット、デメリットについて述べられました。さらに、米の流通に関わる我が国の制度の変遷に関連して「米の自由化」と「特定米穀制度の創設」に伴う流通事情の変化を漫画家つげ義春氏の自叙伝に登場する米取引の事例、株式会社久保商店と同業他社の実情を事例に説明され、今後の展望を述べられました。

■ 意見交換会

身近な話題であったこともあり、意見交換会も和やかなムードの中、さまざまな話題が交わされていました。



全国一の北海道米を目指し、杯を交わす講師のお2人（左：久保氏、右：田中氏）



講演会の様子

